

機動部隊旗艦「大和」 2

熱闘のソロモン

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 佐藤道明

地図・図版 安達裕章

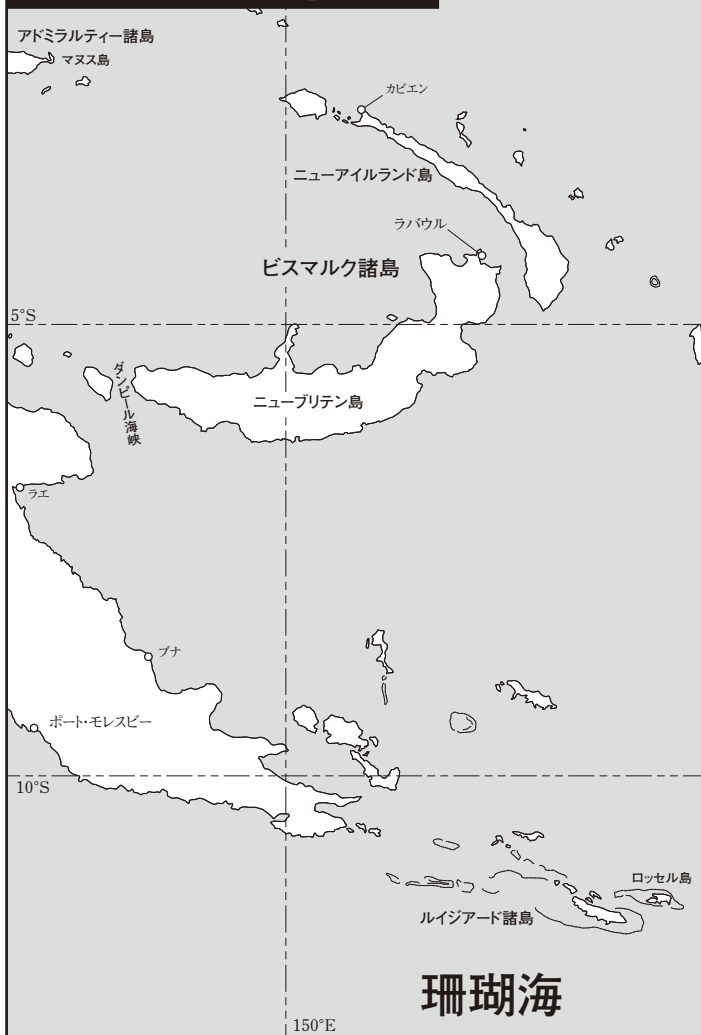
編集協力 らいとすたつふ

目次

第一章	ガダルカナルの城門	9
第二章	南海の堅陣	45
第三章	高空の「マジノ線」	79
第四章	「ビッグ・フォー」炎上	99
第五章	新鋭戦艦咆哮 ほうこう	149
第六章	狙われたラバウル	205



ソロモン諸島周辺図



ガダルカナル島周辺図





機動部隊旗艦「大和」 2

熱闘のソロモン

第一章

ガダルカナルの城門

1

ニュージョージア島南岸のムンダに最初の空襲警報が鳴り響いたのは、昭和十七年七月八日の早朝だった。

ムンダの水上機基地に配備されている第一六航空隊の零式水上偵察機と零式観測機が、定期哨戒飛行に出発しようとしていた矢先だ。

「伝令！」

航空隊本部から、司令付の高桑四郎二等水兵が叫びながら駆けて来た。

「ガツカイ南監視所より緊急信。『敵機約三〇、ヘムンダ』二向カフ。敵高度三〇〇〇メートル！』」
ガツカイ島は、ニュージョージア島の南東端沖に位置する小島だ。日本軍がニュージョージア島を占領した直後に、二箇所の監視所を設けている。

「一六空全機、直ちに離水！」

飛行長宮田節夫少佐が、血相を変えて叫んだ。
ガツカイ南監視所からムンダまでは、約四五哩。
敵機は、一五分ほどで来襲する。

「もやい綱解け。急げ！」

整備長の穴山幸太尉が下令し、各機に取り付いていた整備員が、零式水上偵察機と零式観測機を栈橋に繋留していたロープを解く。

暖機運転を終えた零式水偵がエンジン・スロットルを開き、水面上を滑走する。

一機また一機と離水し、北西に向けて飛び去ってゆく。

「三、四中隊は敵機を迎撃する。離水後は、三〇まで上昇しろ！」

宮田が新たな命令を発した。

第三中隊は、零式観測機で編成された部隊だ。一六空がムンダに配備された当初は六機だけだったが、六月一日のサントイサベル沖海戦後に第四中隊が増援され、現在は二個中隊一二機となっている。

「無茶な命令にもほどがあるな」

第三中隊二番機の機長と操縦員を兼任する稲垣昭平兵曹長は頭を左右に振った。

零式観測機、略称「零観」は、艦隊戦時の弾着観測を主目的に設計された水上機で、開戦の前年、昭和一五年に制式化された。

複葉という、一見時代に逆行するような形式を採用しているが、上昇力と運動性能が優れており、機首に七・七ミリ固定機銃二丁、偵察員席に七・七ミリ旋回機銃一丁を装備している。

これは、弾着観測の任務中に襲って来るであろう敵戦闘機を、自力で排除するためだ。

海軍上層部が、零式水偵と共に零観をムンダに配備したのは、飛行場が完成するまでの間、上空を守らせようと意図してのことであろう。

だが零観の空戦能力は、あくまで自衛が目的だ。圧倒的多数の敵機と戦い、撃退するなど、零観の能力を超えている。

「やるつきやねえ」

稲垣は両手で顔を叩き、自身に気合いを入れた。

第三中隊長石川秀一中尉の機体が滑走を開始する。三菱「瑞星」一三型エンジンがフル・スロットルの爆音を轟かせ、胴体下の単フロートが飛沫を上げる。

中隊長機が離水したときには、稲垣機もロープを解かれ、滑走を始めている。

二枚の主翼が風を一杯にはらみ、胴体下のフロートが水面から離れる。

稲垣機は機首を上向け、中隊長機に続いて高度を上げてゆく。

「三番機離水。四番機滑走中」

偵察員席に座る秋場九郎二等飛行兵曹が、僚機の動きを報告する。

ちらと右方に目をやると、零式水偵が基地を背にして飛び去ってゆく様子が見える。

零式水偵は、戦闘機には勝ち目がない。襲われた

ら逃げ回るしかない。

一六空司令の山内幸彦中佐は、第一、第二中隊に
ひたい 避退を命じたのだらう。

(二、四中隊は助かるまい)

稲垣は、搭乗割を思い浮かべた。

この日の予定では、第一中隊が定期哨戒飛行の担当、第二中隊は機体の整備となっていた。

二中隊の水偵は、直ちに離水できる状態ではない。

四中隊の零観も、事情は同じだ。

迎撃に当たるのは、三中隊の六機だけとなる。

(無理に発進させないでくれ)

宮田飛行長が搭乗員の命を優先するよう、稲垣は祈った。

「高度一〇〇(一〇〇〇メートル)……一二……一四
ヒトマル ヒトフタ ヒトヨン
 ……」

高度計が示す数字を、偵察員席の秋場二飛曹が伝えて来る。

数字が大きくなるにつれ、ニュージョージア島や

レンドバ島が小さく、遠くなってゆく。

二四〇〇メートルまで上昇したところで、敵機の姿が視界に入り始めた。

さかだる 酒樽に、翼を生やしたような形状だ。

グラマンF4F「ワイルドキャット」。米海軍の主力艦上戦闘機だ。何度も日本機と銃火を交えており、零戦の好敵手こうてきしゅとなっている。

敵も零観の姿を認めたのだらう、一〇機前後が編隊から離れ、降下して来る。

零観一機につき、F4F二機が当たる格好だ。かつこう

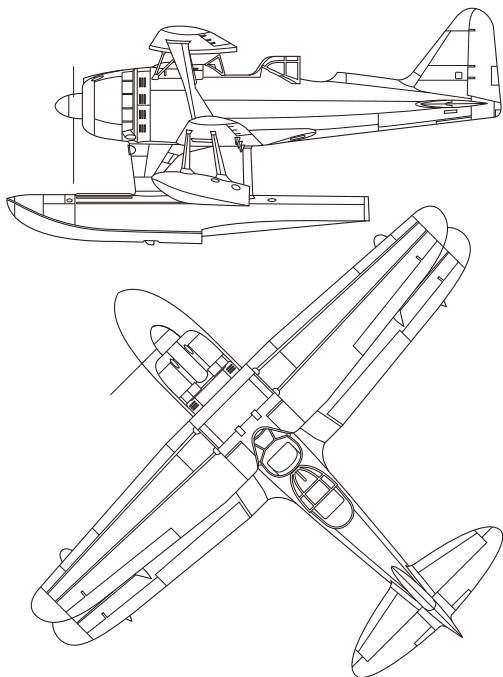
複葉の水上機だからといって、舐めてかかるつもりはないのだらう。

「後方の敵機だけを狙え。前方は気にするな」
 「了解。背中任せて下さい」

稲垣の指示に、秋場は落ち着いた声で返答した。
おび 怯えたり、あせ 焦ったりする様子はない。既に腹をくくっているのかもしれない。

F4Fが、急速に距離を詰めて来る。丸っこい機

日本海軍 零式観測機



全長	9.5m
翼幅	11.0m
全備重量	2,550kg
発動機	三菱「瑞星」一三型 800馬力
最大速度	370km/時
兵装	7.7mm機銃×2丁(機首固定)／7.7mm機銃×1丁(後方旋回) 60kg爆弾×2(最大)
乗員数	2名

日本海軍が運用する観測機。主に戦艦に搭載され、弾着観測と偵察を担当する。一見すると旧式に思える複葉機だが、胴体は全金属製のセミ・モノコック構造で、主翼のあいだの張り線や支柱を極力なくすなど、空力的に洗練された機体である。

抜群の安定性と高い運動性を併せ持つ万能機として、基地航空隊でも使用され、水上戦闘機としての戦果も多数報告されている。

首や中翼配置の主翼が膨れ上がる。

敵一番機の両翼に発射炎が閃く寸前、稲垣は操縦桿を大きく左に倒した。

目の前のF4Fが右に流れ、零観は左に傾いたまま高度を下げた。

右上方で、青白い火箭が空を切る。

「グラマン二機、追つて来ます。左後ろ上方！」

秋場が警告を発した。

稲垣は、今度は操縦桿を右に倒した。

左に旋回しつつ、高度を下げていた零観が右に傾斜する。翼面荷重の小さな複葉機が、小さな円弧を描きつつ降下して行く。

「グラマン、右後方！」

「こなくそ！」

稲垣は、操縦桿を左に倒す。

F4Fが発砲したのだろう、青白い火箭が右方を通過し、下方へと消える。

左旋回に入った零観に、F4F二機が食い下がる。

旋回半径は零観の方が小さいが、速度性能はF4Fが圧倒的に上だ。零観の逃げ道を塞ぐように、円弧の外側から回り込む。

稲垣は、操縦桿を大きく右に倒した。同時に、右フットバーを軽く踏んだ。

零観が横転し、右の翼端を先にして降下に入る。

「グラマン来ます！ 距離〇四（四〇〇メートル）

……〇三……〇二……」

秋場が緊張した声で報告する。

「〇一！」

の叫び声を聞くや、稲垣は操縦桿を目一杯手前に引いた。

零観が引き起こしにかかり、下向きの遠心力が、稲垣と秋場の肉体を締め上げる。

「グラマン、前下方！」

秋場が、敵機の位置を報告した。肩透かしの目論見が図に当たり、F4Fは零観の

下方へと降下した。

稲垣機は、初めて高度上の優位を占めたのだ。

稲垣は、操縦桿を前方に押し込んだ。

F4F二番機の後ろ上方から突進した。

照準器の白い環が、F4Fの尾部を捉える。

発射把柄を握るや、目の前に発射炎が閃き、二条の細い火箭がほとばしる。

機首二丁の七・七ミリ固定機銃だ。零戦の二〇ミリ機銃、米戦闘機の一・七ミリ機銃に比べれば力不足だが、当たりどころによつては撃墜できる。

針のような火箭は、狙い過たずF4Fの尾部に突き刺さった。左の水平尾翼から、細長いものがちぎれ飛んだ。

F4Fは、大きくよろめいた。

泥酔者のように、右に、左にとふらつきながら離脱した。

稲垣の射弾は、左の昇降舵を吹き飛ばしたのだ。

F4Fの一番機が反転し、稲垣機に向かって来る。猛々しい爆音は、怒りの咆哮のようだ。

「複葉の水上機ごときが生意気な」

そんな叫び声が聞こえたような気がした。

稲垣は再び、操縦桿を左に倒した。

零戦が左に旋回しつつ降下し、敵機の火箭が右の翼端付近を通過する。

F4Fが、機体を大きく倒す。

急角度の水平旋回をかけ、稲垣機を追って来る。

稲垣は操縦桿を不規則に、左右に倒す。

零戦は右に、左にと旋回を繰り返し、一二・七ミリ弾の火箭に空を切らせる。

敵弾は右、あるいは左の翼端付近を通過するが、直撃はない。稲垣機は、紙一重のところまでF4Fの射弾をかわしている。

ムンダ沖の海面が、間近に迫った。稲垣機は、着水寸前の低空まで降下したのだ。

F4Fが、なおも射弾を浴びせて来る。海面に突き刺さった射弾が、線状の飛沫を上げる。

後席から、機銃の連射音が届く。

秋場が、七・七ミリ旋回機銃で反撃しているのだ。七・七ミリ機銃は元々非力な上、上方に向けて射撃しているため、銃弾の威力は減殺されている。命中しても、効果は期待できない。

せめて牽制になつてくれれば、と稲垣は願った。

F4Fの銃撃は、唐突に止んだ。

「命中！」

秋場の快哉の声が、伝声管を通じて伝わった。

稲垣は、咄嗟に後ろ上方を見た。

F4Fが、白煙を引きながらよろめいている。

エンジン出力が低下しているのだろう、速度が低下し、高度も下がっている。

秋場が放った七・七ミリの射弾がカウリングを貫通し、エンジンを傷つけたものと推測された。

ほどなく、秋場が「一機撃墜！」と叫んだ。

F4Fは再び上昇に転じることはなく、海面に突っ込んだのだ。

（基地はどうなった？）

稲垣は肝心なことを思い出し、ムンダの水上機基地を見た。

どす黒い火災煙が目に入った。

「やられたか……」

稲垣は呻き声を漏らした。

三〇機もの敵戦闘機を、複葉の水上機六機で防ぎ切れる道理がない。こうなるであろうことは、最初から分かつていた。

それでも、炎上する基地の姿を目の当たりにすると、平静ではいられなかった。

このときには、爆音が遠ざかりつつある。

ムンダ攻撃を終えた敵が引き上げつつあるのだ。

稲垣機の周囲に、二機の零観が降下して来る。

永江健作二等飛行兵曹が操る三番機と、新宮三郎

一等飛行兵曹が操る第二小隊の二番機だ。

他に、友軍機は見当たらない。

迎撃に当たった零観六機は、石川第三中隊長の機体も含め、三機を失ったのだ。

「一六空本部より受信。『残存機ハ（シヨートランド）ニ避退セヨ』と命じています」

秋場が報告した。

シヨートランド島は、ブーゲンビル島の南岸沖に浮かぶ小島だ。この三月、日本軍がブーゲンビル島に進出したとき、水上機の基地が建設されている。当面はムンダから後退し、新たな命令を待てということだろう。

稲垣は、燃料計を見た。

まだ、六割ほどが残っている。シヨートランドまでは、何とか飛べそうだ。

「シヨートランドに向かう。『我ニ続ケ』と各機に打電せよ」

稲垣は秋場に命じた。

残存する三中隊搭乗員の中では、稲垣が最上級者だ。部下を、安全な場所に避退させる責任がある。

「『目標（シヨートランド）』。我ニ続ケ」と各機に打電します」

秋場が復唱^{ふくしょう}を返した。

稲垣は、操縦桿を手前に引いた。

零観が上昇に転じ、シヨートランド島がある北西に機首を向けた。

2

ソロモン諸島は、北側にチヨイセル島、サントアイサベル島、フロリダ島、マライタ島が、南側にペラ・ラベラ島、ニュージョージア島、ラッセル島、ガダルカナル島などがそれぞれ連なる。

北部諸島と南部諸島の間に形成された水路を、連合軍は「溝^{ザスロット}」と呼称する。

ソロモン諸島北西端のブーゲンビル島から、南東端のサンクリストバル島まで、約四〇〇哩に及ぶ長大な「溝」だ。

七月一〇日午後、その「溝」を、一群の艦船が一八ノットの艦隊速力で、東南東に進撃していた。

三本煙突の輕巡洋艦二隻が先頭に立つて横陣を作り、その左右に駆逐艦二隻ずつが傘型に展開する。輕巡と駆逐艦の後方には、城郭のようなヴォリュームのある艦橋を持つ重巡洋艦一隻、やや小さな重巡四隻が単縦陣を形成している。

三川軍一中将が率いる第八艦隊だ。

先頭の輕巡洋艦二隻は、第一八戦隊の「天龍」と内地から増派された「由良」。

左右に展開するのは、第二四駆逐隊の白露型駆逐艦「海風」「山風」「江風」「涼風」。

重巡は、第八艦隊旗艦「鳥海」と第六戦隊の「青葉」「加古」「古鷹」「衣笠」だ。

「鳥海」「加古」「衣笠」は、去る六月三〇日のニューヨーク・ジョージア沖海戦で被弾したが、損傷箇所は上甲板や居住区の一部に留まっており、戦闘・航行に支障はない。

各艦の乗員は、この一〇日前、米豪艦隊を相手に大勝利を収めているだけに、皆意気軒昂だった。

「右前方に島影」

一三時四三分（現地時間一五時四三分）、艦橋トップの射撃指揮所から報告が上げられた。

「ラッセル諸島です」

航海参謀の篠原多摩夫中佐が言った。

ラッセル諸島は、ガダルカナル島の北西に位置する島々だ。

目的地のルンガ——ガダルカナル島北岸にある岬までは、約五〇哩の距離がある。

「針路をもう少し北寄りに取ろう」

三川軍一司令長官は命じた。

ラッセル諸島には、敵基地の存在は確認されていないが、洋上監視所が置かれている可能性がある。敵に視認される危険は、できる限り避けたい。

「各艦に信号。艦隊針路九五度」

「航海、取舵一五度」

参謀長大西新蔵少将が指示し、「鳥海」艦長早川幹夫大佐が航海長茂木史郎少佐に命じた。

「取舵一五度。針路九五度」

茂木が、操舵室に命じる。

前方に展開する軽巡二隻、駆逐艦四隻が順次左に艦首を振り、「鳥海」以下の重巡五隻も続く。

「ここまでは無事に済んだが、この先はどうか？」

「気象班は、日没は一六時一三分（現地時間一八時一三分）と報告しております。日没までは二時間半ですが、敵飛行場からの距離を考えますと、空襲の可能性はあります」

三川の問いに、航空参謀の国崎光弘少佐が答えた。「米軍、ガダルカナルに上陸」の第一報が第八艦隊司令部に入ったのは、七月六日の午後だ。

ガダルカナル島はソロモン諸島の南部に位置しており、日本軍もFS作戦——米豪分断作戦の一環として、進出を予定していた。

ムンダに建設中の飛行場が完成したら、直ちに上陸部隊を送ってガダルカナルを占領するつもりだっ

たのだ。

ところが、米軍は日本軍の動きを読んでいたかのように、いち早くガダルカナルを押さえにかかった。偵察機が持ち帰った写真は、同島北岸のルンガに群がる多数の輸送船や陸揚げされた地上部隊の他、土木用の機材をも捉えていた。

米軍は、ガダルカナルに上陸したその日のうちに、飛行場の建設にとりかかったのだ。

「敵の基地航空隊がガダルカナルに進出して来たら、厄介です。飛行場が完成する前に叩くべきです」

首席参謀神重徳大佐が真つ先に意見を具申し、他の参謀も同調した。

三川はそれらの意見を容れ、ラバウルに駐留していた第二五航空戦隊にガダルカナル攻撃を命じた。

同部隊は、元々塚原二四三中将の第一一航空艦隊に所属していたが、現在は第八艦隊の指揮下に入っている。

翌七月七日、二五航戦の一式陸攻三〇機がガダル

カナルに建設中の敵飛行場を攻撃したが、敵戦闘機
の迎撃を受け、一〇機を失って敗退した。

二五航戦は、「敵飛行場は建設が始まったばかり
であり、戦闘機はまだ進出していない」と判断し、
攻撃隊を陸攻のみで編成したが、米軍はまだ飛行場
とも呼べない平地に戦闘機を送り込み、運用を始め
ていたのだ。

翌七月八日、米軍はあたかも七月七日の報復をす
るかのように、ムンダの水上機基地を攻撃した。

同地の第一六航空隊は、麾下の零式水偵と零観の
半数に当たる一二機を泊地で破壊され、迎撃に当た
った零観六機中三機を撃墜された。

残存機はショートランド島の水上機基地に後退し
たものの、ムンダの水上機基地は壊滅し、飛行場の
建設も中断せざるを得なくなった。

「航空攻撃が駄目なら艦砲です。八艦隊の主力をル
ンガに突入させ、重巡の主砲で敵飛行場を叩きまし
よう」

神首席参謀は強気の姿勢を崩さず、三川にも否や
はなかった。

七月八日午後、ラバウルより出港した第八艦隊主
力は、ソロモン諸島に沿って南下し、ガダルカナル
の敵飛行場から五〇哩の海域に到達したのだ。

（我々は、米軍を甘く見過ぎた）

三川には、その後悔がある。

サンタイサベル沖海戦、ニュージョージア沖海戦
と連勝したことで、日本軍は既にソロモンの制空権、
制海権を奪取したと思っていた。

ニュージョージア島ムンダの飛行場はまだ建設途
上だが、水上機部隊は既に進出しており、ソロモン
諸島南端のサンクリストバル島付近まで、監視の目
を張り巡らしている。

この状況で、米軍がソロモン諸島に上陸を企て
るとは考えていなかった。

だが、米軍はやって来た。

ガダルカナル島に飛行場を建設し始めたばかりで

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。